NPO ハロハロ 2015 年夏スタディツアー

参加者レポート

（日程）2015 年 8 月 8 日(土)～8 月 15 日(土)
（場所）フィリピン －マニラおよびセブ－

◆　2015 年夏のスタディツアーに寄せて

2015 年夏のスタディツアーは、大学生参加者のみで実施した初めての回となりました。初海外という方もいて初日は私にも皆さんの不安や緊張が伝わってきましたが、ホームステイで気持ちもほぐれ、最終日にはそれぞれが達成感をもち大きく成長した 1 週間だったように感じました。何かを聞きたいのに質問が、言葉がうまく浮かんでこないというような皆さんがはがゆく感じているような場面も何度もありました、あとから思い出してこれを聞きたかった、ということがわかったらいつでも気軽に質問して下さい。皆さんの疑問が、質問が、現地にも当団体にも相互理解を育む大きなきっかけになります。

若い皆さんがこうして貧困問題に関心を持ち、現場まで足を運んでくれことは、社会に見捨てられたように感じて生きる貧困の連鎖の中に置かれる人々にとって、大きな勇気になります。誰かが自分なんかのことを気にしてくれている、それならもう少しがんばってみよう、そんな勇気が地域の人々を主体にしたコミュニティデベロップメントを可能にしています。改めて皆様のご訪問そしてご協力に心より感謝申し上げます。

理事長：成瀬　悠

◆　会計報告

（収入）参加費合計：234,400 円　サポーター費合計：9,000 円

（支出）

CEBU 合計：19,300php　57,900 円

宿泊費 ホテル 2 泊/2,600php　ホームステイ 3 泊/4,800php

人件費　フィリピン人ボランティア 4 日間 2,000php

調理費 600php　コーディネート費 2,000php

飲食材料費　3,000php　雑貨製作費　300php　旅費交通費　2200php　寄付　1,800php

MANILA 合計：8,400php　25,200 円

宿泊費 ホテル 1 泊 1,451php　学校ステイ 600php

日本側合計：115,000 円

人件費：27,000 円　事務経費：15,000 円　旅費交通費：64,000 円　会費：9,000 円

参加費差額の【47,247 円】ならびに会費【9,000 円】を今後の当団体と現地協働団体のコミュニティデベロップメント活動全般に当てさせて頂きます。

ハロハロスタディツアーを終えて

日本でハロハロのボランティアをしているとき、漠然とフィリピンの貧しい人々のためになる活動をしている、という感覚でした。ですが今回、実際に現地で暮らす人々の生活を体感し、そして今まで商品として完成した姿しか知らなかった Angkyut の雑貨を、実際に１から作っているお母さんの姿から見て、ハロハロが変えようとしている環境とそこに暮らす人々の意識という両方の側面から今行っている活動の意義を知ることができました。必要なものをただ与える「支援」ではなく、何が必要なのか、それがなぜ必要なのか、そしてそれによってどんな変化を起こして行くべきかをきちんと現地の人との対話や現地調査の中で進めて行く「現地主体」というワードを大切にしているというところに強く共感を受けるとともに、現地のコミュニティで活動する人々の話を聞く中で彼らの生活の中の当たり前と今の自分の生活においての当たり前の間の大きな差異を感じ、その中で現地の人々の意識から変えていくという試みの難しさも同時に感じました。

観光客や現地の裕福な人々が集う大型ショッピングモールから数十分車を走らせればゴミ捨て場の近くで生活している人の姿があって、彼らの生活にとってそれは日常になってしまっていることも私の日常からは遠い現実です。途上国では都市の中心のすぐ近くにスラム街がある様子は当たり前のように見られますが、日本の今生活している環境の中で、こういった「貧富の差」というものを在り在りと感じることは滅多にありません。
グレマーさんと話した中で日本の生活環境についての話題が出て、「日本の国内でもまだ貧しいと感じている人たちはたくさんいる」と言ったところ、彼は「でも日本の貧乏とここの貧乏は全く別ものだよ」と答えていました。日本でいう" 食っていけない" と質の違う“食っていけない” 生活がそこにはあって、この本当の意味での" 食っていけない生活" に対する想像力や危機感が今の日本の人にはあまり無いように感じました。
だからこそ日本にいるだけでは、スラムもダンプサイトも世界が抱える問題の１ つとして知っているばかりで、今この時、実際に起きている現実として感じることはできません。スタディツアーを通して自分の中で「知っている問題」が「体感した現実」になったことは本当に意味のあることだったと思います。

そして、経験としてもたくさんのことを学びましたが、思い出としても多くのものを現地の人々からいただきました。育ってきた環境も言葉も違うけれど、同じ音楽を歌い合ったり、言葉を教え合ったり、自撮りし合ったり…同じ瞬間に笑い合えることが本当に幸せでした。私がホームステイしたお家にいたアニータという女性は一番私のそばに居て世話を焼いてくれました。そんな彼女はよくよく聞いたらその家の家族ではなく親戚の方で、漁師の仕事で忙しい両親に変わって子どもたちの食事や小さい赤ちゃんの世話をしていました。彼女は朝、子どもたちを学校に送り出し、その後すぐに近くにある自分の実家に戻り今度はそのうちにいる父親や
親戚たちのご飯を用意して、洗濯をする…そんな生活を当たり前のようにこなしていました。貧困の連鎖が続く中で、アニータとその家族のように自分を支えてくれる家族を尊敬し、親戚どうし近くに住み、それぞれの生活を少しずつ支え合いながら共存している姿を見て、彼らの中には負の連鎖に負けない「感謝の連鎖」もまた続いているのだと強く感じました。そんな連鎖の中の一端に自分も触れられたこと…裕福とは言い切れない中でもいっぱいの優しさと美味しいご飯をくれたホームステイの家族、近所の皆さんと出会えたこと、自分ももらった経験やもらった気持ちを何か次に繋げてお返ししたいと思います！

ハロハロのスタディーツアーに参加して

私がこのスタディーツアーに参加して学んだことは大きく二つある。

一つ目はいろいろな支援の形だ。私は今までボランティアという言葉に対して「助けてあげる」「偽善者」「自己満足」といった印象がありボランティアそのものが好きではなかった。NGO や NPO に対してもやはりそういった印象があり、最初はこのツアーに参加するべきかどうか迷った。私は日本では考えられないような生活を体験したい、発展途上国で何が起きているのか自分の目で実際に見てみたい、それだけを目的として参加した。しかし、結果としてこのツアーで一番考えさせられたことは支援の形だった。

食べ物やお金やモノを与えることは一つの支援の形であり即効性もある。しかし、長期的に見た時にそれは本当の支援とは言えないと思った。グレマーさんの話の中で「大切なのは意識を変えることだ。」という言葉があった。私の中で一番印象に残っている言葉だ。よりよく発展していこうとしていく中で貧困、学校、ごみ、トイレ、医療等多くの問題を抱えているが、支援だけで解決するのは当然無理であるし、現地の人たちが問題意識を持って共に動いていくことが必要不可欠である。問題意識を持っていないと与えられたお金やモノも上手く生かせない。明日になればまた潮が満ちてゴミだらけになってしまう干潟を、地域の住民の方と日本から来た私たちが一緒に泥だらけになりながら、ゴミ拾いをすることも「地域の住民の方の意識に働きかける」という点で無意味ではなかったのだ。ホームステイ先は、トイレは一応あるものの食事中はハエが飛び交い、衛生環境がよいとは言えず、水道ガスも通っておらず、電機は電球が二個一階と二階にあるだけでコンセントの穴は４つだけだった。そこに八人の家族がひしめくように生活していた。そんな中で私を受けいれてくれて家族かのように温かく接してくれた。そんな彼らがこれからどう発展していくのか、私の面倒をよく見てくれた長女の女の子は私に話してくれた夢を大学に行って叶えられるのか、今回のスタディーツアーで終わりではなく、私にできることをして支えながら見守っていきたい。

二つ目は「考えることの大切さ」である。私は今まで理解することに必死で、それが正しいのか、自分はそれに対してどう思うか、疑問はないかを考えることがあまりありませんでした。このスタディーツアーでは支援のシステムや内容を理解するだけでなく、問題点や改善点を自分で考えて自分から発信することが要求される。日頃いかに自分が流れに乗って適当に生きているのか、中身のない人間なのかを痛感した。「物事を理解するだけでなくもっと踏み込んで考える」というこれからの自分の課題点を見つけることが出来た。

最初は人見知りで緊張して、英語も拙く失敗もたくさんしたが、周りの人たちに助けられながら打ち解けていって、生涯忘れられないいい経験ができた。最後にこのスタディーツアーに関わった皆様に対して感謝の意を述べたい。ありがとうございました。

2015 年スタディーツアー夏に参加して

私は、「食べ物に困る生活」というものを経験したことがなく、どこか「貧困」というものを本やテレビの中で見るもののように感じていました。私がいくら彼らの気持ちを想像しても、彼らの気持ちが分かるわけではありません。私たちはそもそも根底にあるものが違います。けれども、身近にその人々を感じることによって、彼らに寄り添うきっかけを作ることが出来たような気がします。

私は学生であり、家族に甘えて生きており、あらゆる場面での経験は乏しいものです。それゆえ、鋭い質問や、理解を深めていくことが難しかった部分があります。しかし、地域の人々と関わり、3 日間だけでも一緒に暮らして、私は真剣にこの人々が、自分の手で未来を切り開ける可能性が持てる世の中になって欲しい、そんな世の中を創りたい、と思いました。

私のホームステイした家には、冷蔵庫も、コンロも、トイレも、机もありませんでした。ホームステイ先のお父さんは漁師、お母さんはサリサリストアで店に立ちながら洗濯、親戚の子どもの子守、食事作りをしていました。お姉さんは夜に働きに出るため、昼夜逆転の生活を送っていました。それぞれまじめに一生懸命働き、忙しいに違いありませんでしたが、「もっと食べなさい」「気をつけてね。滑りやすいよ」と、掛けてくれる言葉はすごく暖かく、とても素敵な家族でした。ホームステイは 3 日だけですが、私はもう 1 つの家族の一員になりました。

ゴミ山の視察では、マニラは壁に覆われていたのに対し、セブはむき出しの状態でした。現在、訪ねたセブのゴミ山にはゴミが来ることはありません。そのそばに住んでいた多くの人々は、既に移動していましたが、残った人々に、話を伺うことができました。スカベンジャーの人々は、日雇いの仕事で生計を立てることになり、話を伺った家族は、自分たちも移動したいと思っているが、お金がないので出来ず、活気も無く、衛生環境的に悪そうな場所で生活していました。あの家族はどうやって生き残っていくのでしょうか。ただ live ではなく survive なところに、厳しさを感じました。

そして今回、「環境美化プロジェクト」に参加し、地域のマングローブ林周辺のゴミ拾いを地域の方々と共に行いました。「発展」しようとすると「環境」のことを考えなくなると言うのは、いつの時代も、どこの国でも繰り返されていることです。海の汚染は、漁村にとって大きな問題でありますが、「貧しい」という区分に入る人々が、自分たちの地域を自分たちの手で変えようとするパワーを、私は感じました。私のそれまでのイメージでは、「高学歴で、時間的にも金銭的にも余裕のある人々」がこのような活動をしている、というものでしたが、ここでは、そこに住む人が、自分自身で信念を持って活動していました。

ここでの経験は、世界の問題のほんの一部でしかないといえます。また、自分の見方と

いうものも、これから大きく変わっていくことでしょう。けれども私にとっては、大きく、貴重な経験でした。まずは、自分にできる、地道なことから、取り組んでいこうと思います。そして、自分の道を自分で狭めずに、あらゆることに挑戦し続けていこうと思いました。この企画に関わって下さった皆様すべてにお礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました！